

21st Century Museum of Contemporary Art, Kanazawa

PRESS RELEASE

2010.4.28 改訂



Alternative Humanities — 新たなる精神のかたち
ヤン・ファールブル × 舟越 桂
2010年4月29日[木・祝] → 8月31日[火] 金沢21世紀美術館

展覧会名	Alternative Humanities ～新たなる精神のかたち：ヤン・ファールブル × 舟越 桂	
会期	2010年4月29日(木・祝) → 2010年8月31日(火)	
	開場時間：10時～18時(金・土曜日は20時まで) チケットの販売は開場30分前まで	
	閉場日：毎週月曜日(ただし、5月3日、7月19日、8月9日、8月16日、8月30日は開場) 5月6日、7月20日	
会場	金沢21世紀美術館 展示室1～12、14	出品点数 約190点
料金	一般1,500円(1,200円) / 大学生1,200円(1,000円) / 小中高校生600円(500円) / 65歳以上1,200円 ()内は前売、団体料金	
ゲストキュレーター	マリー=ロール・ベルナダック(ルーヴル美術館学芸員)	
企画アドバイザー	高階秀爾(美術史学者、大原美術館館長)、古田 亮(美術史学者、東京藝術大学 大学美術館准教授)	
主催	金沢21世紀美術館 [(財) 金沢芸術創造財団]	
後援	フランス大使館、ベルギー大使館、ベルギーフランドル交流センター、北國新聞社	
協力	日本航空、日本通運、エルメス、アイ・オー・データ機器、坪田電機株式会社	

本資料に関する
お問い合わせ

金沢21世紀美術館 展覧会担当/不動・村田 広報担当/落合・沢井
〒920-8509 金沢市広坂1-2-1
TEL 076-220-2814 FAX 076-220-2802
http://www.kanazawa21.jp E-mail: press@kanazawa21.jp



展覧会について

現代美術シーンにおける彫刻的表現で秀逸な活動を展開する2人の作家—ヤン・ファールブルと舟越桂—をとり上げ、彼等が背景として持つ宗教概念を象徴的に示す歴史的作品(フランドル絵画の宗教的図像、狩野芳崖、河鍋暁斎の観音図等)とともに展覧する大規模な二人展。本展は、ルーヴル美術館で近年話題となった企画(「変貌の天使」展、2008年)を参照し、同展企画者のマリー＝ロール・ベルナダック氏をゲスト・キュレーターとして迎えて立ち上げる共同企画展である。

ベルギーに生まれたヤン・ファールブルは、1980年代より、昆虫や動物の死骸、剥製、血や塩といった素材を作品に取り入れ、人間の生と死、精神性、宗教性を問うてきた。演劇やパフォーマンスなど多岐に渡るファールブルの表現世界は、キリスト教文化や思想という西洋の精神性の現代的解釈・批評そのものである。

一方、舟越桂は一貫してクスノキによる木彫を手がけ、人間の姿を表現し続けている。作品全体には、のみ痕の力強さとともに繊細さが調和し、独自の表現世界が確立されている。初期に聖母子像などの聖人像を手掛けた舟越は、その後の人物表現においても超越性、精神性に満ちた木彫世界を創出してきている。近年ではスフィンクスというモチーフも加わり一層多様性を増す舟越の作品世界は、仏教彫刻の伝統をも内包する宗教性に満ちた表現である。

ファールブル自身のルーツであるフランドルで生まれたフランドル絵画の宗教的図像をひとつの核としてファールブルの造形表現を俯瞰することによって、ファールブルの作品世界の背景にあるキリスト教文化や精神性との関係性を問い、日本における西洋近代主義受容の様相や展開を象徴的に示す狩野芳崖、河鍋暁斎の観音図をもうひとつの核として舟越の作品世界を俯瞰することによって、舟越の作品世界に息づく独特の日本的宗教観を問う。

このように本展では、両作家の作品世界を対比的に検証することによって、両洋の精神性の根源に多角的にアプローチすることを試みる。西洋における近代主義の多様性に触れつつ、西洋中心主義の観点からは周縁に位置する日本のモダニズム受容の様相を相対的に検証し、グローバリズムがますます進む世界状況のなかで、前世紀に、社会から分断され断絶されたかに見えた宗教美術が現代美術の底流においていかなるかたちで受け継がれているかをあぶり出し、その行方を考える。

展覧会の特徴

1. 現代美術をリードするヤン・ファールブルと舟越桂の大規模な二人展

金沢21世紀美術館のコレクション《雲を測る男》で知られるベルギー生まれのアーティスト、ヤン・ファールブルと、日本を代表する彫刻家、舟越桂。現代美術シーンを代表する二人のアーティストの世界を初期から新作まで約160点の作品によって紹介します。各作家の展示内容も国内ではかつてない大規模なスケールの二人展です。

2. ルーヴル美術館よりゲスト・キュレーターを招いて立ち上げたユニークな共同企画

今回の「Alternative Humanities ～ 新たななる精神のかたち:ヤン・ファールブル×舟越桂」は、ルーヴル美術館の現代美術担当学芸員として目覚ましい活動を展開中のマリー＝ロール・ベルナダック氏をゲスト・キュレーターに迎え、金沢21世紀美術館と共同で企画した展覧会です。2008年にベルナダック氏が担当したヤン・ファールブルの展覧会「変貌の天使」では、ルーヴル美術館の北方絵画展示室で、同館のコレクション作品とファールブルの作品を大々的にコラボレーションさせ話題となりました。この展覧会を参照し、日本という地域と金沢21世紀美術館という現代美術の場にふさわしい企画として新たにコンセプトを練り上げ、生まれたのが本展です。

3. 西洋と東洋の違いや時代を超えて21世紀に息づく人間の精神のかたちを問う

本展では、ファールブルと舟越それぞれの表現がどのような文化的背景の上に成立しているかを象徴する歴史的名画も展示され、二人のアーティストの作品とその源泉となる古典とがコラボレーションします。ファールブル自身のルーツであるフランドルで生まれたフランドル絵画と舟越の作品世界に息づく独特の日本的宗教観を示す近代日本の観音図などが集い、現在と過去という時間や東洋・西洋といった地域的な差異を超えて人間の精神のかたちが響き合います。ルーヴル美術館、アントワープ王立美術館から日本初公開の16世紀頃の宗教画や肖像画、またフランス国立ギメ東洋美術館や日本国内から近代日本の観音図など数多くの名作が登場。ギメ東洋美術館からは、河鍋暁斎の《釈迦如来図》が里帰り展示されます。

4. 企画アドバイザーに日本を代表する美術史研究の第一人者を迎えた展覧会

この展覧会では、日本における美術史研究の第一人者、高階秀爾氏と日本近代美術史の気鋭の研究者、古田亮氏を企画アドバイザーとしてお迎えしました。両氏には、西洋美術史や日本近代美術史の視点から、ファールブルと舟越という二人の現代作家とその表現に、広大かつ深淵な人間の歴史が繋がっていることを総合的に検証していただきます。その検証のもとに21世紀の人間性とは何かという大きな問いが投げかけられます。

本企画の
ポイントについて

企画アドバイザー 高階秀爾氏(大原美術館館長)の談話

(2010,2,25,金沢市政記者クラブ 記者会見にて)

ヤン・ファープルと舟越桂。言うまでもなくたいへん優れた現代作家です。では、それを一つに組み合わせることによってどういう意味があるか。これが今回の企画のたいへん重要なポイントになります。

ルーヴルをご承知のように、フランスの国立美術館です。フランスの美術館は国立が中心ですから、それぞれ分野、領域分けがあります。ルーヴルの所蔵品は、古代エジプト・オリエントから19世紀中頃までという年代設定をしています。ですから19世紀の中頃、ロマン派とか新古典派の作品まではルーヴルにある。しかし印象派やゴッホなど、19世紀の後半は国立オルセー美術館の担当領域になっている。そして20世紀の新しい美術は、ポンピドーセンターの国立近代美術館が担当。そういう3つの非常に大きな施設が繋がって活動しています。

ルーヴルは、もっぱら古いところが中心で当然、優れた古典的な作品が保存されている。しかし美術館というのは、決して古い作品の墓場ではない。もちろん古いもの、大事なものを保存して見せる。しかしそれが現代の見る人、観客、生きる人々にとって大事な意味を持っている。さらに芸術家たちに新しいインスピレーションも与える。様々な力を及ぼす。つまり現代に生きているものである。それを示すために、現代作家を招いてルーヴルの中での展覧会を数年来始めております。各国の様々な現代作家を招いてルーヴルの中でやる。ヤン・ファープルもその一人です。招かれた作家は、膨大なルーヴルの所蔵作品のなかで、自分にとっての古典的な作品の意味というものと対応する形で、つまり単に展示場として作品を並べるだけではなく、古典との対話、あるいは対抗を通じながら作品を作っていく。そういう意欲的な試みをやっております。

その中でも特に大がかりな試みとして行われたのが、ヤン・ファープルを招いての展覧会でした。ファープルは、フランドル、今のベルギーのアントワープに生まれています。子どもの時からフランドル絵画に親しみがある。ルーヴルにももちろんフランドル絵画がある。ヤン・ファン・エイク、ロヒール・ファン・デル・ウェイデン、あるいはボッシュ、ブリーゲルといった作家までルーヴルにはあります。フランドル絵画そのものがヨーロッパ美術の中でたいへん大きな位置を占めているのです。

ファープルは自分の生まれ育った、フランドルの絵画の部屋を自分の展示の場所としたいということでもやりました。その展覧会をマリー＝ロール・ベルナダックさんがキュレーションしました。この方には、かつて私はポンピドーセンターにいたときにお会いしました。つまり現代美術の専門家です。ルーヴルが現代に取り組むというので、現在はルーヴル美術館でその企画の中心になっています。そのベルナダックさんがキュレーションをして、ファープルはフランドル絵画の中の色々な側面というものを自分の創作と照らし合わせながら作り上げたものを展示しています。

今回アントワープ王立美術館から来るフランドル絵画は、キリストがイバラの冠を受けて鞭打ちの刑を受けた姿、聖家族の像などの代表的な作品です。キリストは神の子ですが人間として地上に来て、人間の罪を負って十字架にかかった。人間として死んだわけです。しかし神として復活して、天に昇ったということになっている。生と死に関するこの問題は西洋のキリスト教文明にとって非常に大きな問題です。

それは肉体と精神というもう一つの問題につながる。今回のタイトル「Alternative Humanities～新たなる精神のかたち」にも示されているとおり、人間が持っている心と身体の問題。ファープルはそれについて深く考えた作家です。ファープルには西洋の現代美術、あるいは西洋文明を通して現在、世界的に広まっている文明観というものに対する新しい見方やコンセプトが非常に強くある。それはどういふものか。基本的に西洋の科学的合理的思考では、生と死は別のものである。人間は生きているときは生きているし、死ねば別の世界です。同様に身体と精神は別のものである。デカルトの二元論です。様々な機能を持った身体の世界と、また別の精神の世界、ふたつの世界を人間が一つに統一するというわけです。さらに言えば、人間の世界と自然界、これも西洋では基本的に別の世界である。聖書によれば人間は神が創った。世界を全て造った中で最後に人間を創った。自然の世界は人間より低いものだという思想があります。

それに対して、ヤン・ファープルは非常に鋭敏にそうではないという。彼自身がベルナダックさんにインタビューされた時にそう言っている。人間の生と死は繋がっているんだ、全く別のものではない。人間は死んでまた蘇るというキリスト教の復活の思想があるが、これは別世界ではなくて、人間は生命であると同時に死を常に抱えているということです。精神と肉体は切り離せない。精神と肉体は一つ。自然と人間、これも別世界ではない。

彼はこれを作品に表現するときに、はなはだ先鋭的で我々を驚かせるようなやり方を用います。実際、彼は自分の血を使ってデッサンをするとか、肉体的なものを作品に応用する。今回、例えば動物や人間の骨で作った像というものもある。骨というのは死の世界です。死の世界であり肉体の世界、それを人間のかたちとして作りあげる。しかもこれは骨を外側に置いている。人間の骨というのは、本来身体の中にあって見えないものです。それが外側にある。ひっきりかえしてあるわけです。内部を引き出すことによって、存在というものを新しい視線の下にさらす。「骨をもった天使」というタイトルが付いていますが、天使というのは、神の世界と我々人間の世界とを繋ぐものなんですね。日本式に言えば彼岸とこの世と言ってもいいかも知れない。天と地は、別のものではない。ないしはそれは繋がっている。その繋がるシンボルが天使になるわけです。そこで昆虫の殻を使った天使像というものも生まれてくるわけです。

これはつまり、全てを合理的に科学的に分けていって世界を理解していた科学主義文明ではない、そこに実は繋がりがあつた。それが大事なことではないか。それは現在の問題、例えば自然との問題でも、自然は人間とは違う、だからそれを征服するとか、あるいは人間の文明から排除するということを合理主義文明はやってきた。しかし、そうではない。自然と人間は一体のものだという考えが、ヤン・ファールにはある。

これは現在の環境問題にとっても非常に重要なポイントです。自然は人間のためにあつて、人間はそれを使つたり征服したりするという分割的な二元論に対する、非常に新しい人間論でもあるし、文明論でもあり文化論にもなる。そういう視点を鋭く持った作家です。それをなはだ前衛的な鋭い造形感覚で作り出しています。作品の中には心臓や、人間の身体の臓器を出したり、あるいは身体の一部を作つたり、様々なかたちで我々の意識というものを新しい方向へ目覚めさせていく。その背後にはもちろんキリスト教の思想というものがある。

ルーヴルではフランドル絵画の部屋で、それに応じて自分の考えを反映させた作品を展示しました。ルーヴルは古いものを持っている。しかしそれは同時に現代に繋がるんだという歴史的な視点がある。金沢21世紀美術館はまさに逆です。逆で繋がるわけです。21世紀という現代であるわけですが、しかしそれは現代だけで済む話ではない。歴史と繋がっているんだという視点がある。現代と過去は分けられるものではない。繋がりがあつたということを使う必要がある。それをファールの作品を通して行う。

そしてもう一人の舟越桂が、そこにどう関わってくるか。舟越は優れた作家で、木彫、特に楠にこだわっている。楠というのは古事記にも出てきます。昔から非常に特別な木です。香りも良い。楠に限らず、日本人は昔から木に対する信仰心があります。これは西洋とは違う。木だけでなく、山でも川でも、神がいる。巨石信仰もある。つまり自然というものをひとつに考える。昆虫の世界ももちろんそうです。これは科学的な合理主義に対する日本の芸術のたいへん重要なメッセージです。もともと日本では「山川草木悉く仏性あり」と考える。これは仏教の思想を日本で取り入れたもので。山だって川だって、草木にも仏の魂があるという視点です。分けるのではなく、つながっているという視点がある。

舟越作品も一面では前衛的な作品です。肩から手が生えていたり、首が異常に長かったり。いわゆる普通の人物像ではない。しかしファールの場合と同じように、我々をドキッとさせるようなところがありながら、改めて人間像を考えさせるところがある。ヤン・ファールは造形作家だけではなく、実際に演劇というパフォーマンスもやりますし詩人でもある。舟越もたいへん言葉に敏感で、例えば「冬にふれる」と題された作品には、季節感がある。「水に映る月蝕」もそうです。舟越さんが持っているイメージの底にある自然との繋がりが、それがたいへんよくタイトルに出ている。そういった意味では詩人でもあります。そして人間の持っている身体的なものを強調しながら新しい世界を作っていくということが大きな意味を持っている。

古典作品の方で言うと、今回はフランスにあります河鍋暁斎の《釈迦如来図》が来ます。作品としても見事なものです。お釈迦様はもともと人間だったわけですが、別の世界というものに目覚めた人、それを現代でどうやって受け止めるかという問題がある。芳崖の天女像が出るというのもよい。天女というのは、まさに西洋で言えば天使です。天と地を繋ぐ、あるいはそこを結ぶ。つまり世界は決して分けただけでは済まない。例えば医学というのは人間の身体をいろいろ分けます。心臓、胃、外科とか内科とか専門に分けることによって機能もわかり、医学も進歩する。しかしそれで済まないものが必ずある。人間全体は決して分けられない、それが人間の正体。それが現代の我々の生き方にとってたいへん大きな意味をもつ。

展覧会全体のタイトル「Alternative Humanities～新たなる精神のかたち」というのは、分けられない人間、新しい人間の見方でもあるわけです。従来とは違った、新しい人間。芸術家は非常に鋭い意識でそれを感じ取って、それを優れた表現で示している。フランスで活躍している西洋の代表のファール、そして日本代表の舟越を並べ、そこで対話をさせること。ルーヴルの場合には古典的なものがあつて、新しいヤン・ファールが入つた。今展の場合には逆に、舟越、ファールという現代ものがあつて、そこにフランドル派の絵画や日本の仏教、宗教的絵画、生き方として深く関わっているものを含めて並べようというコンセプトです。

ルーヴルでのファール展のコンセプトをファールとともに作つたのがベルナダックさんです。その考えをベースにして、ルーヴルでのファール展に呼応させるかたちで、日本と西洋の優れた芸術を通しての文化の対話にもなる、今回はそういう展覧会です。西洋と日本の考え方、これは共通部分と異なる部分が共に大きい。西洋も日本も、その他様々な異質な文化も、一緒に共存していかなければいけない。異質な文化が摩擦を起こせばかりては困るわけですから。今の時代の多様な文明観を考えようと言う、野心的とも言えば大変野心的なプログラムです。そして同時に、優れた現代美術の展覧会となるでしょう。

作家プロフィール



ヤン・ファールブル
photo: Stephen Mattues © 2009 Angelos

ヤン・ファールブル Jan FABRE

1958年アントワープ(ベルギー)生まれ、同地在住。
美術、演劇、オペラ、パフォーマンスなど、ジャンルを横断する活動で知られている。昆虫やクモの観察から構築されたドローイング作品や動物の死骸や剥製を取り入れた彫刻作品、また、血や塩などを用いたパフォーマンスなど、生と死についての探求が一貫してファールブルの制作テーマとなっている。

出品予定作品: ヤン・ファールブル《昇りゆく天使たちの壁》他およそ40点



舟越桂
撮影: 内田芳孝 courtesy: Nishimura Gallery
© Funakoshi Katsura

舟越桂 FUNAKOSHI Katsura

1951年盛岡市生まれ、東京都在住。
一貫してクスノキによる彫刻表現を手がける。生み出されるかたちには、滑らかさや繊細さと、作品全体に残るのみ痕の力強さとの調和があり、独特の存在感が漂う。詩的で気高さに満ちた作品は、「具象」や「観念」といった概念を超越する世界像を示す。1988年第43回ヴェネツィア・ビエンナーレ、2003-04年「舟越桂展」(東京都現代美術館他5館巡回)、他数多くの展覧会に出品し、現在、国内外を問わず最も重要なアーティストの一人として評価されている。

出品予定作品: 舟越桂《冬にふれる》他およそ120点

両洋の歴史的名画より
出品予定作品

ロヒール・ファン・デル・ウェイデンの原画に基づく《ブルゴーニュ公、フィリップ善良公(1396-1467)の肖像》(ルーヴル美術館蔵)
ヤン・マトゥッセイ《聖家族》1563年、他5点(アントワープ王立美術館蔵)
15世紀フランドル派《悲しみの聖母》15世紀(国立西洋美術館蔵)
アンソニー・ヴァン・ダイク《アマリア・フォン・ソルムス＝ブラウンフェルズの肖像》1629年(東京富士美術館蔵)
河鍋曉斎《釈迦如来図》(フランス国立ギメ東洋美術館蔵)、《慈母観音》(財団法人 日本浮世絵博物館蔵)
《白衣観音図》《九相図》《惺々暁斎下絵帖》他2点(河鍋曉斎記念美術館蔵)
狩野芳崖《飛翔天女》《悲母観音(複製)》《観音(複製)》(下関市立美術館蔵)
川島基兵衛(二代)《悲母観音図綴織額》1895年(東京国立博物館蔵)
東翠石《悲母観音図綴織額織下絵》1894年頃(株式会社川島織物セルコン 織物文化館蔵)

関連イベント
(予定)

ラウンド・テーブル「現代と人間像」

4月29日(木・祝) 14:00～

[出演] ヤン・ファールブル、舟越桂、マリー＝ロール・ベルナダック、高階秀爾
[会場] 金沢21世紀美術館 シアター21 [料金] 無料
[定員] 130名(当日午前10時よりレクチャーホール前にて整理券を配布します。)

記念講演会「近現代の観音イメージ」

6月27日(日) 14:00～

[講師] 古田亮
[会場] 金沢21世紀美術館 レクチャーホール [料金] 無料(ただし、本展観覧券が必要です。)
[定員] 80名(当日午前10時よりレクチャーホール前にて整理券を配布します。)

ギャラリー・トーク「狩野芳崖と悲母観音」

8月3日(火) 14:00～

[講師] 古田亮
[会場] 金沢21世紀美術館 レクチャーホール、展示室 [料金] 無料(ただし、当日の本展観覧券が必要です。)
[定員] 50名(当日午前10時よりレクチャーホール前にて整理券を配布します。)

当館学芸員によるギャラリー・トーク

広報用画像

※クレジットは全て明記してください。 トリミングはご遠慮ください。
 ※キャプション等の文字が画像にかぶらないよう、レイアウトにご配慮ください。
 ※ご掲載の際は恐れ入りますが校正の段階で広報室までご確認ください。

1



ヤン・ファープル ^{から}《私自身が空になる(ドワーフ)》2007年 個人蔵
 絵画: ロヒール・ファン・デル・ウェイデンの原画に基づく
 《ブルゴーニュ公、フィリップ善良公 (1396-1467)の肖像》
 ルーヴル美術館絵画部門、MI818
 photo: Attilio Maranzano © Angelos / Jan Fabre

2



ヤン・ファープル
 《水に書く男》2006年 galerie guy pieters, Belgium
 photo: Patje Verbruggen © Angelos / Jan Fabre

3



ヤン・ファープル
 《小さい闘士》1978 / 2006年 個人蔵
 photo: Attilio Maranzano © Angelos / Jan Fabre

4



ヤン・ファープル
 《首吊りの自画像》1999年
 Fondation Raimunda Munoz Ortega, Mula (Spain)
 photo: Attilio Maranzano © Angelos / Jan Fabre

5



ヤン・ファープル
 《隣隣》2001年 個人蔵
 photo: Pat Verbruggen © Angelos / Jan Fabre

6



ヤン・ファープル
 《雲を測る男》1997年 金沢21世紀美術館蔵
 撮影: 中道淳/ナカサンドパートナーズ
 © Angelos / Jan Fabre

7



ロヒール・ファン・デル・ウェイデンの
 原画に基づく
 《ブルゴーニュ公、フィリップ善良公
 (1396-1467)の肖像》
 ルーヴル美術館絵画部門、MI818
 © RMN / Jean-Gilles Berizzi /
 distributed by AMF - DNPartcom

8



作者不詳《エック・ホモ》16世紀
 アントワープ王立美術館蔵
 © Lukas - Art in Flanders VZW /
 Royal Museum of Fine Arts Antwerp

9



ヤン・マセイス《聖家族》1563年
 アントワープ王立美術館蔵
 © Lukas - Art in Flanders VZW /
 Royal Museum of Fine Arts Antwerp

10



ヤン・デネンス《ヴァニタス》17世紀
 アントワープ王立美術館蔵
 © Lukas - Art in Flanders VZW /
 Royal Museum of Fine Arts Antwerp

広報用画像

※クレジットは全て明記してください。 トリミングはご遠慮ください。
 ※キャプション等の文字が画像にかぶらないよう、レイアウトにご配慮ください。
 ※ご掲載の際は恐れ入りますが校正の段階で広報室までご確認ください。

11



舟越桂
 《森の奥の水のほとり》2009年 西村画廊蔵
 撮影: 渡邊修 © Katsura Funakoshi

12



舟越桂
 《急がない振り子》2010年 西村画廊蔵
 撮影: 渡邊郁弘 © Katsura Funakoshi
 courtesy: Nishimura Gallery

13



舟越桂
 《「冬にふれる」のためのドロージング》
 1997年 作家蔵
 © Katsura Funakoshi

14



舟越桂
 《戦争をみるスフィンクス》2005年 個人蔵
 撮影: 内田芳孝 © Katsura Funakoshi
 courtesy: Nishimura Gallery

15



舟越桂
 《戦争をみるスフィンクス(制作過程に彩色)》
 2005年 作家蔵
 撮影: 今井智己 © Katsura Funakoshi

16



舟越桂
 《水に映る月蝕》2003年 作家蔵
 撮影: 今井智己 © Katsura Funakoshi
 courtesy: Nishimura Gallery

17



河鍋曉斎
 《釈迦如来図》1876年
 フランス国立キメ東洋美術館蔵

18



河鍋曉斎
 《慈母観音像》1883年頃
 財団法人 日本浮世絵博物館蔵

19



狩野芳崖
 《飛翔天女》明治時代
 下関市立美術館蔵

20



川島甚兵衛(二代)
 《悲母観音図綴織額》1895年
 東京国立博物館蔵
 Image: TNM Image Archives

会場図

- ヤン・ファープル
- 舟越 桂
- 共通(ヤン・ファープル、舟越桂)
両洋の歴史的名画

